

〈文献紹介〉

北欧中世史学の到達点

書評: K. Helle (ed.), *The Cambridge History of Scandinavia I: Prehistory to 1520*, Cambridge: Cambridge UP 2003, xx + 872 p.

小澤 実

はじめに

かりに、中世ヨーロッパ世界を、ブリテン諸島とフランスからなる西欧、イベリア半島とイタリア半島からなる南欧、旧神聖ローマ帝国の影響圏と重なる中欧、ヨーロッパロシアからバルカン半島に至るスラヴ語圏を中心とする東欧、そして現在のデンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、アイスランドからなる北欧と、大まかに地理区分した場合、その通史的理解に最も困難を感じるのはおそらく北欧である。これは我が国特有の事情ではなく、欧米の中世史学界でも同様である。

その最たる理由は、欧米の中世史学界で通用する学術言語、つまり英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語で書かれた北欧中世史の研究が、「ヴァイキング時代」と呼ばれる特定の時代と、サガ文献を産み出した盛期中世のアイスランドを除いて、極端に少ないことにある。旧稿にも記したように、ソーヤー夫妻の英語通史とM・カウフホルトのドイツ語通史が公刊されるまで、北欧中世に特化した通史は長らくL・ミュッセによるフランス語のそれただ一冊に留まっていたのである⁽¹⁾。この三冊にしても、執筆者の専門のためであろう、叙述の多くは12世紀以前に限定され、複雑な政治過程を辿ることになる中世後期は棚上げされているという、共通の問題点を孕んでいる⁽²⁾。20世紀になって公刊されたヨーロッパ史の叢書群においても、北欧は、無視されるということはなかったにせよ、他の地域と比べると割り当てられた頁数において十分な扱いを受けていたとは到底言えな

い⁽³⁾。

かつて同様の事情はイベリア半島史や東欧史にも当てはまっていたが、とりわけ戦後に入って、イベリア半島史については英米仏の研究者が、東欧史についてはドイツならびに英米の研究者もしくは現地出身の亡命研究者が、積極的に成果を公表したために、今では非現地語による研究進展にはめざましいものがある。そうした潮流の中にあつて、北欧は最後の「未踏の地」となっていた観がある。

以上のような現状を考えるならば、本書の公刊は革命的と言ってもよい。全三巻が予定されている本叢書第一巻は、先史時代から1520年までを扱っており、編者はベルゲン大学名誉教授のクヌート・ヘッレが務める。1930年生まれである彼は、盛期中世ノルウェー行政史の専門家であり⁽⁴⁾、ノルウェー中世基本史料集成の編纂⁽⁵⁾、ノルウェー中世盛期の研究現状の総覧⁽⁶⁾、ベルゲン市通史第一巻の執筆⁽⁷⁾、ノルウェー通史のスタンダードであるアスケホウク社『ノルウェー史』の編纂と第四巻の執筆⁽⁸⁾、そして現在は『ノルウェー人名事典新版』の統括編集者として⁽⁹⁾、なお学界をリードしている。全7部24章の執筆者は、デンマーク人5人、ノルウェー人6人、スウェーデン人10人、フィンランド人3人、アイスランド人2人、イギリス人2人の計28人から構成されており、いずれも当該分野の重鎮である⁽¹⁰⁾。先史から中世末に至るまでのあらゆる局面に触れようとした800頁の本文、44頁の文献目録、27頁の索引という文字情報に加えて、63葉の写真、7葉の図、15葉の地図、8葉の表が適宜折り込められ

それと必ずしも重なるわけではなく、「北歐的なるもの」を多分にのこした理想的な人間生活の時代と理解されていた。

かりにこのスカンディナヴィア主義がなおもその生命力を弱めることがなかったとしたら、19世紀後半から20世紀の初頭に各国のアカデミーの知性を結集した北歐中世史がすでに出版されていたかもしれない。しかしながらこの運動の背後には、大陸世界と変わらぬ一国単位の民族アイデンティティが見え隠れしていたように思われる。その結果、19世紀後半にもなると協調主義的なスカンディナヴィア主義は後景に追いやられ、各国の事情に応じたナショナリズムが前景に迫り出してくる⁽²⁰⁾。ただし、私たちが注意しなければならないのは、一連の運動の中で磨き上げられた理想像としての「北歐的なるもの」は必ずしも一国単位の国家意識の中に回収され霧散してしまったのではなく、なおも北歐人の意識にまわりつきたままであった、という点である。

(2) 各国史の隆盛

北歐中世史が描かれなかった理由は、スカンディナヴィア主義の退潮と民族ナショナリズムの台頭だけではない。もう二点あげておこう。

一点は、北歐三国が王室を核とした国家体制を敷いていたことである。これはもちろん王室が直接的に研究の進展を阻害したということではない。中世以来北歐の各王室は歴史叙述者にとって財政面における援助者であり、また教会施設と並ぶ公式記録の保存者であったことを考えれば、むしろ推進者であったとすらいえる⁽²¹⁾。問題は、歴史叙述の対象として政治史が中核を占めたことにある。北歐三国における政治史とは、すなわち領土の拡大縮小を伴う王朝盛衰史を意味したが、それは必然的に王権の起源、形成、展開を単線的に求める結果へとつながった。

もう一点は、19世紀後半から歴史学の専門化ならびに組織化が急進したことである。近代学問の組織化に最低限必要なのは、大学における講座と研究成果を発表する専門誌である。1900年時点では歴史学の講座をもつ高等学術機関は、デンマークではコペンハーゲン大学、ノルウェーではオスロ大学、スウェーデンではウップサラ大学とルンド

大学であった。歴史学専門誌の確立はヨーロッパの中でも早く、デンマークで1840年に、ノルウェーで1871年に、スウェーデンで1881年に『歴史学雑誌』が創刊されている。ここで重要なのは、国家単位で研究者集団が組織化されるようになったということである。もちろん歴史家個人のあいだでは、研究書、抜き刷り、書簡のやりとりをつうじて私的なネットワークが形成されていたが⁽²²⁾、講座で要求される講義内容は通常自国史である。また、一般から需要を見込むことができるのもまずは自国史であり、出版社はその執筆者に当代随一の知識人、つまり各国にほぼ一つずつしかない大学の講座主任教授をあてるのが通常であった。

以上のような背景が重なり、19世紀末から20世紀にかけて、各国では比較的短いスパンで国史が出版された。評者の調査によれば、20世紀初頭から現在までに公刊された中世通史（学生用ハンドブックも含む）の数は、デンマークが9、ノルウェーが10、スウェーデンが7であり、執筆者はそれほど重複していない。しかしその中でも叙述形式や問題設定において後々まで影響を及ぼした歴史家は限られており、20世紀前半であれば、デンマークはE・アロップ⁽²³⁾、ノルウェーはE・ブルとA・ホルムセン⁽²⁴⁾、スウェーデンは通史を残したわけではないが、ヴェイブル兄弟をあげることができる⁽²⁵⁾。世紀後半にはいと今なおスタンダードな通史として参照価値のあるものが現れる。デンマークでは60年代にポリティケン社から出版された叢書⁽²⁶⁾、ノルウェーは70年代にカップレン社から出版された叢書⁽²⁷⁾、スウェーデンはJ・ロセーンによる一巻本である⁽²⁸⁾。

デンマークでは80年代にはいりギュレンダル社とポリティケン社が共同で⁽²⁹⁾、ノルウェーでは90年代に入りアスケホウク社が新しい通史を出版した⁽³⁰⁾。世紀転換期にはデンマーク、ノルウェー、スウェーデンいずれにおいても、若手研究者による高水準の研究書を手にすることができるようになる⁽³¹⁾。

(3) 「北歐中世史」への道

前節で見たように、20世紀北歐では個別国家史が再生産される歴史を歩んでいたように見える。しかしながら第一節で述べたように、19世紀以来

ている。これだけのヴォリュームが、ほぼ全ての研究者によって理解可能な英語によって執筆されているのである⁽¹¹⁾。本書の発案から完成に至るまでどれほどの時間が必要であったのか、明示的に述べられている箇所はない。しかしながら執筆者の一人は1995年にこの世を去っていることを考えるならば、おそらく各章担当者への執筆依頼から優に十年以上の歳月が費やされている。

さて、評者は先に本書をして「英語による」北欧中世史という点で革命的であると評したが、実はこれだけ大部の「北欧中世史」が北欧人研究者の手によって公になったということそのものが、すでに革命的なのである。というのも、驚くべきことに、当の北欧諸国内において「北欧中世史」の書かれたことが、皆無に等しいからである⁽¹²⁾。次章では、19世紀にまで遡り、その経緯を振り返ってみたい。

1. 「北欧中世史」への道

(1) 「北欧的なるもの」の探求

私たちが「北欧 (Scandinavia / Norden)」という言葉を用いる場合、ほぼ無意識的に現在のデンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、アイスランドという五つの国家領域と重なる空間を想定する⁽¹³⁾。そしてその「北欧」には、政治的にであれ文化的にであれ何らかの共通する要素、つまり「北欧的なるもの」が存在しており、それ以外の地域とは別のアイデンティティと稼働原理が働いていると考える傾向がある⁽¹⁴⁾。とりわけ言語的にも社会システムのにも類似の要素が大きいデンマーク、ノルウェー、スウェーデンの三国に関しては、ともすれば対外政策から生活慣習にいたるまでの全ての面において「カルマル同盟」が連綿と継続しているような錯覚すらおぼえる。しかしながらこのような考え方は、私たちを含めた「外国人」の発想であり、「北欧」に生を享け、そこで生活を営む当事者たちのそれとは大きく異なる。以下で見るように、少なくとも北欧各国における歴史学の歩みを振り返る限り、そのように判断できる。それでは、北欧の歴史家たちが、「北欧的なるもの」を探求しなかったのかといえ、それは否定されねばならない。事態を理解するた

めに、とりあえずは19世紀中葉の「スカンディナヴィア主義 (Skandinavismen)」の時代にまで遡る必要があるだろう。

「スカンディナヴィア主義」は、それを口にする立場によってかなりの温度差があるために一義的に定義することは難しいが、さしあたり次の考えにしたがっておこう。つまり、一般的には「嘗ての『輝かしき一つなる北欧』への回帰に由来する時代認識並びにそれに関連した人びとの運動」であり、19世紀中葉の歴史的な文脈に嵌め込んでみるならば、「民族的ロマンティズムのうちに育まれた思想、そしてそれに源を有する北欧諸民族の連帯を求める運動」であった、とする定義である⁽¹⁵⁾。この思想にして運動には、その思考形態と行動様式にしたがっていくつかの段階が認められるが、おおまかには1830年前後を分水嶺として、それ以前の「文学のスカンディナヴィア主義」と「政治のスカンディナヴィア主義」とに大別することができる。理念型でいうならば、すなわち前者は「北欧」の壮麗なる過去を様々な文芸作品の中に表出しようとする動きであり、後者は「北欧」意識を高めることによって外部勢力との摩擦を解決しようとする運動である⁽¹⁶⁾。いうまでもなく、それぞれの背後には全ヨーロッパ規模で興っていたロマン主義運動とナショナリズムの高揚を指摘することが可能であり、スウェーデンの研究者B・ストロートは、「スカンディナヴィア主義」をして、大陸部でほぼ同時代に進行していた統一ドイツ、統一イタリア、汎スラヴ主義という三つの潮流に対応する動きであると主張する⁽¹⁷⁾。

いずれにせよ、ここで必要となったのは、外部との差異を強調するための「北欧的なるもの」という対抗アイデンティティを創出することである。そこで北欧諸国の知識人が持ち出してきたのは、ヴァイキング時代以前の北欧圏全域を覆っていたとされる「古ノルド文化」であり⁽¹⁸⁾、その本質は「平等主義的な農民」像にあった⁽¹⁹⁾。それは、1848年革命の余波と基幹産業としての農業という背景を考慮するならば、当時の北欧社会に極めて親和的であったことが想像される。北欧外部のヨーロッパ人にとって、「ヴァイキング時代」とは西欧各地の教会や修道院への波状的な襲撃が始まった8世紀末以降を指すが、北欧内での認識は

スカンディナヴィア各国には伏流としての「北歐的なもの」を求める傾向があったことは忘れてはならない。

20世紀に入って学者集団が「北歐中世史」を構想する大きな契機は二度あった。最初は、1931年から56年にかけて刊行された、30巻からなる『北歐文化』である⁽³²⁾。これは、北歐古世界に見いだされる様々な特質の概説を目指すものであり、各巻を一人が執筆もしくは編集した叢書である。二度目は、『北歐文化』の完結した1956年から78年にかけて刊行された、22巻からなる『北歐中世文化史事典』の刊行である⁽³³⁾。これは、刊行途中の『北歐文化』に不満を持ったデンマークの言語学者L・ヤコブセンが、ナチスドイツによる占領期の亡命先であったスウェーデンで交友を深めた友人らとともに、『北歐文化』に置き換えるべき事典を目指したその成果である⁽³⁴⁾。北歐五カ国における中世研究の最高知性を編集顧問としたこの事典は、『北歐文化』と同じく、完結までに20年以上の歳月を必要としたが、いまなお北歐中世史研究に不可欠の情報を与えてくれる⁽³⁵⁾。

以上のような北歐内の動きにくわえて、外部からの刺激も考慮する必要がある。一つは、ゲルマン学の総力を結集した『ゲルマン古代学事典』第二版の刊行である⁽³⁶⁾。この事典は7世紀末までのゲルマン語圏を対象とすることを編集方針として掲げているが、北歐に限っては11世紀、つまりヴァイキング時代まで含んでいる⁽³⁷⁾。北歐の第一線の研究者も執筆を担当しており、ヴァイキング時代以前の研究には必要不可欠となっている。もう一つは、北歐外の研究者による研究の進展である。北歐人研究者たちも、ドイツにおける碑文学研究、アメリカにおけるアイスランド研究、イギリスにおけるヴァイキング研究の質の高さを無視することはできず、それどころか積極的に取り込んでいった形跡を認めることができる。1993年には、北歐内外の協力者を得て、英文による充実した北歐中世事典も編まれた⁽³⁸⁾。

本書が企画されはじめたと考えられる1990年代には、各国史全盛ながらも、「北歐的なもの」を意識させる内外の刺激があり、「北歐中世史」を描き出す下地は醸成されていたといえる。こうして北歐のアカデミズムによる学知の集積が、

『ケンブリッジ版スカンディナヴィア史』第一巻となって結実したのである。

2. 内容構成

(1) 本書の構造

本節では、本書の内容構成を紹介したい。

編者ヘッレによる導入(1-12頁)と結論(771-800頁)によって挟まれる本論は、大きく六部に分かたれている。第一部は「スカンディナヴィアの地理と先史」、第二部は「ヴァイキングから王へ」、第三部は「物質面の成長(1350年まで)」、第四部は「盛期中世諸王国」、第五部は「盛期および後期中世文化」、第六部は「後期中世社会」と表題される。

四章から構成される第一部「スカンディナヴィアの地理と先史」は、スカンディナヴィア世界の独自性を一方で規定する独特の自然地理的要素と、文献史料にその活動の一端が現れるまでの先史時代を概観する。第1章、U・スポァロン「スカンディナヴィアの景観とその資源」(17-42頁)は、9葉の地図を効果的に用い、緯度、経度ともに広範囲に亘るスカンディナヴィア世界における、地質構成、土壌条件、気候、植物相や動物相といった自然地理学上の構成要件を整理する。第2章、A・シーリアイネン「石器ならびに青銅器時代」(43-59頁)は、ヨーロッパ北部で形成されたある人間文化が、陸伝いにスカンディナヴィア南部へ流入するおよそ1万3000年前を起点とし、やはり同様の経路から青銅器作成技術がスカンディナヴィア世界へ到達する、紀元前1800年前後に始まる青銅器時代までを扱う。第3章、B・ミュレ「鉄器時代」(60-93頁)は、紀元前500年から紀元後800年までを三つの段階に区分し、ローマ世界の接触に配慮しながら、スカンディナヴィア各地の諸権力の生成を跡づけている。第4章、M・バーンズ「言語とエスニックグループ」(94-102頁)は、言語学の立場から、スカンディナヴィア内で使用された諸言語の特徴を整理する。

四章から構成される第二部「ヴァイキングから王へ」は、ヨーロッパ史でいえばカロリング期から11世紀までを包摂するいわゆる「ヴァイキング

時代」を扱い、海外に展開する一方で独自の政治組織を成形する時期のスκανディナヴィア世界を扱う。第5章、P・ソーヤー「ヴァイキングの拡大」(105-120頁)は、793年に始まる北歐人の西ヨーロッパへの襲撃活動と、東方への拡大を時系列的に追いながら、その要因として年来の自説にしたがい人口増加と富の獲得を強調する。第6章、E・ロエスダール&P・ムーレングラハト=セアンセン「ヴァイキング文化」(121-146頁)は、エッダやスカルド詩という文献史料とルーン碑文や遺構という考古学資料の両面から、ヴァイキング時代の北歐に特有の精神ならびに物質文化を抽出する。第7章、B&P・ソーヤー「キリスト教ヨーロッパに突入するスκανディナヴィア」(147-59頁)は、教会組織による布教だけではなく、キリスト教徒であった商人達からの情報伝達も含めて、どのようにキリスト教がスκανディナヴィア世界へ導入されたのか、ルンド大司教座の成立に至るまでを跡づける。第8章、「初期の政治組織」は、本章の総説である(a)節、T・リンドクヴィスト「導入としての俯瞰」(160-167頁)を含めて、さらに五つの小節に分節する。(b)節、I・スコウゴア=ペターセン「デンマーク王国の形成」(168-183頁)は、叙述史料の問題点を強調しながら、ヴァルデマー朝以前の内乱期までを整理する。(c)節、C・クラア「ノルウェーの初期統一」(184-201頁)は、デンマークをはじめとする対外勢力との関係に注目しながら、ハーラル美髪王のノルウェー「統一」から1130年のシグル聖地行王の死までを扱う。(d)節、M・ステファーンソン「大西洋のスκανディナヴィア人島嶼コミュニティ」(202-220頁)は、北海の北辺に連なるスκανディナヴィア系住民の影響圏にある島嶼、つまりオークニー諸島、マン島、ヘブリディーズ諸島、フェーロー諸島、アイスランドの動勢について、住民の血液型等からも新しい知見を得ながら通覧する。(e)節、T・リンドクヴィスト「スウェーデンの諸王と諸地域」(221-234頁)は、史料の残存状況から解釈の難しい13世紀までのスウェーデンを、後世の法史料等にも手がかりを得ながら再構成する。

三章から構成される第三部「物質面の成長(1350年まで)」は、第二部では扱うことができなかったヴァイキング時代から中世半ばにかけての社会経

済史的側面を、様々な歴史資料を駆使しながら再構成する。第9章、O・J・ベネディクトウ「人口動態」(237-249頁)は、人骨、教区簿冊、地名等多様な手がかりから引き出された数値を複数の表にまとめ、平均余命や死亡率の時代的ならびに地域的差異を呈示する。第10章、E・オルマン「農村の状態」(259-311頁)は、他章に比べて長尺であるが、可耕地の多いデンマークと少ないノルウェーの差異にも注意を払い、作物種、耕地構造、農耕技術、農地の所有形態、人口移動等多様な面を整理しながら、中世前期における北歐農村社会の変動を跡づける。その際、純粋に農業だけではなく、鉱業や、補助手段としての狩猟ならびに漁労にも十分な頁を割いている。第11章、H・アンデション「都市化」(312-342頁)は、本質的に農村社会である北歐において、都市網がどのように広がり、とりわけ前章で詳述された農村との関係の中でどのように機能していたのかを整理する。

二章から構成される第四部「盛期中世諸王国」は、他のヨーロッパ諸国と同様ひとまず王国の私たちをとったデンマーク、ノルウェー、スウェーデンの各国の政治過程を辿る一方で、盛期中世において到達した各国の統治機構の解明に重点をおきながら整理する。また同時に、中世社会の生活サイクルを規定する教会組織の歩みについても論じる。第12章「国家単位の統治システムに向けて」は、本章の総説である(a)節、K・ヘッレ「導入としての俯瞰」(345-352頁)を含めて、五節に分節される。(b)節、I・スコウゴア=ペターセン「デンマーク王国：統合と解体」(353-368頁)は、デンマーク中世盛期を規定するヴァルデマー朝の政治過程と統治機構を、本節著者の専門である歴史叙述にも注意を払いながら整理する。(c)節、K・ヘッレ「ノルウェー王国：継承紛争と統合」(369-391頁)は、近年専門誌上で応酬のあった盛期ノルウェー政治史を特徴づける「内戦」の生起構造と、同時に進行していた行政機構の体系化を中心に叙述する。なお、アイスランドに関する箇所はM・ステファーンソンが執筆している。(d)節、H・シュック「フォルクング朝下のスウェーデン」(392-410頁)は、フォルクング朝下における社会の階層化と行政機構の構造を整理する。(e)節、K・ヘッレ「成長するスκανディナヴィア諸

国の相互連関」(411-420頁)は、(b) (c) (d) 節が基本的に各国内の問題を検討していることを承けて、それぞれの対外関係ならびに相互関係を整理する。中世盛期は、ノルウェーは西方へ、デンマークは大陸とバルト海へ、スウェーデンはフィンランドへその影響圏を拡大した時代にあたり、さらに三国間の利害が複雑にもつれ始め、カルマル同盟の前提を準備した時代でもあることを巧みに整理している。第13章、E・オルマン「教会と社会」(421-462頁)は、大陸に遅れてキリスト教を導入することになった北欧世界が、その後いかにして社会全体をキリスト教化するようになったのかを詳述する。

四章からなる第五部「盛期ならびに後期中世文化」は、第二部第6章を承けて、大陸世界との相互連関とのなかで独自の文化を育みはじめたスカンディナヴィア人の文化状況を多面的に描く。第14章、S・バッゲ「イデオロギーと心性」(465-486頁)は、「名誉」という概念に注目しながら、ヴァイキング時代とは異なりキリスト教世界からの影響を多分に受けている指導者層のイデオロギーと、日常生活の行動を規定する心性を、歴史社会学的な手法で整理する。ただし、分析の対象はほぼ上位階層に限定されている。第15章、L・レンルート、V・オーラソン、A・ピルツ「文学(献)」(487-520頁)は、それぞれ東部スカンディナヴィア文献、西部スカンディナヴィア文献、ラテン文献を専門とする著者たちが、中世北欧から伝来する諸作品をジャンルごとに分類し、内容だけではなく書き手や生産の場にも注目しながらその全体像を呈示する。第16章、A・ニルセー「美術と建築」(521-549頁)は、ロマネスクから後期ゴシックまで様式変遷する造形芸術を、イングランド、フランス、ドイツといった周辺諸国との交流を視野に入れながら、整理する。第17章、I・デ・イエー「音楽」(550-555頁)は、短い章ではあるが、先史時代から宗教改革直前に至るまでの音楽史的歩みを紹介する。

五章から構成される第六部「後期中世社会(1350年から1520年まで)」は、黒死病の蔓延を受けて人口構造が決定的に変化した北欧社会の様相を整理する。第15章、J・ヴァートラ「人口と定住」(559-580頁)は、北欧各国で国家プロジェクトの

組まれた「廃村現象」で蓄積されたデータを利用して、人口動態と定住構造の変動を跡づける。第19章、E・オルマン「農村居住者の状態」(581-610頁)は、同一著者による第三部第10章を承けて、黒死病経験後の農村状態を叙述する。第20章、G・ダールベック「都市」(611-634頁)は、中世後期になってその重要性を増す各国の都市群の動向を、商業ネットワーク、労働人口の移動、王権の関心等と連関させながら論じる。第21章、E・ウルシ「後期中世の貴族」(635-652頁)は、北欧社会のあらゆる局面において極めて重要な役割を果たす貴族の動向を、各国ごとの特徴を考慮しながら整理する。第22章、L・ハムレ「教会と聖職者」(653-675頁)は、貴族とならび王国経営にとって不可欠の存在である教会勢力の活動を、教皇庁や公会議主義との関係も視野に入れながら論じる。その際、聖ビルギッタによって創設されたビルギッタ会の動向に重点を置いている。

二章から構成される第七部「スカンディナヴィアの諸同盟(1319年から1520年まで)」は、第12章(e)節から続くスカンディナヴィア三国の国家運営上の駆け引きが、1397年の「戴冠文書(the Act of Coronation)」と「合同文書(Union Document)」の締結という焦点を経て、対外的に、相互関係的に、そして国内的にどのように変動し、そして宗教改革期へと繋がっていくのかを論じる。第23章、H・シュック「政治システム」(679-709頁)は、統治システムの機能と変動を整理する。そして長尺の第24章、J・E・オレセン「スカンディナヴィア相互の関係」(710-770頁)では、各国の利害にしたがって動揺し、最終的にはスウェーデンが離脱することになる同盟システムの政治過程を時系列的に追っている。

(2) 全体の特徴と問題点

以上、本文の内容に即して全体構成を紹介してきた。本節では本書全体に該当する特徴と問題点について述べてみたい。

北欧人による「北欧中世史」の前例がないので従来の叙述と比較することはできないが、冒頭で紹介した外国人による三冊と比較した場合、二つの特徴を指摘することができる。第一は随所に見える比較史的視点である。初期中世から盛期中世

にかけての政治過程に関してはなお各国別となっているが⁽³⁹⁾、第三部や第五部のような同一章内で複数の国家もしくは地域を扱う場合には、国家間の差異を引き出すようにしている事例がしばしば見られる。前述したように、北欧の歴史学会はこれまでに何度か比較史的テーマを設けて成果を論文集にまとめている⁽⁴⁰⁾。第二は社会経済史に割り当てられる頁の比重が大きい点である。確かに北欧諸国は以前より農村史研究の盛んな地域であるが、本書においても都市史を含めた人間の生活空間に対する関心は極めて高い。その背後には、前章で述べたように「北欧的なもの」の核心をなす「平等主義的な農民」像という意識と、その探求を後押しするマルクス主義史学の隆盛（とりわけノルウェー、スウェーデン、フィンランド）があったと考えられる⁽⁴¹⁾。それに加えて、スウェーデンやデンマークでは講座が置かれるまでに至った中世考古学の確立⁽⁴²⁾、黒死病の影響に関する研究の増大⁽⁴³⁾、廃村や中世都市に関する国家プロジェクトの公刊等も考え合わせなければならない⁽⁴⁴⁾。

さて、今度は問題と思われる点を指摘してみたい。第一は、史料論の欠如である。現在の中世史学は、史料上の文言の解釈のみに留まることなく、史料に記された情報の伝達の経路や書き手もしくは編者の意図もしくは彼らのおかれた環境にまで踏み込むことが要求されるようになってきている⁽⁴⁵⁾。そうであるからこそ、史料論に関わるシンポジウムがたびたび開催されていると考えられるのであるが、本書ではその点に留意した論考は極めて少ない。現在の研究状況を鑑みるに、史料論が最も必要とされているのは北欧中世史の分野である⁽⁴⁶⁾。というのも、北欧中世に関わる史料は他の国に比べれば相対的に少なく、その少ない史料の公刊が不完全であり、ある特定ジャンル、たとえばアイスランドのサガ文献やサクソ・グラマティクスの著作にばかり研究者の関心が集まっているという現状があるからである。そうした問題点を他地域の研究者に周知させるためにも、史料論は不可欠であったと評者は考える。第二は、社会構造と展開を説明する分析枠が、王権、教会、貴族という三分法から抜け出していない点である。本書もその系譜を引く伝統的な歴史叙述では、王権と教会の

反目、教会と貴族の対立、貴族と王権の角逐という構図が強調される傾向があったが、近年の研究においては、家門、「友誼」、地域間利害という観点から事件の経過を説明するケースがしばしば見られる⁽⁴⁷⁾。これは人物誌研究の盛んなドイツ中世史学の影響を受けてのことであるが、在地有力者、司教、修道院長らのリスト化すらおぼつかない現在の北欧中世史学の現状を鑑みるに、同様の手法を全時代に適用することはなお困難である⁽⁴⁸⁾。第三は、地域的特性の欠如である。先に本書には随所に比較史的視点があることを特徴の一つとして指摘したが、それは基本的に国家間の比較であって、同一国内の地域間のそれではない。同じスウェーデンでもヨーランドとノールボッテンでは、ゴットランドとウップランドでは社会構造も文化状況も根本的に違うと考えられるが、ほとんど触れられることはない。中央と地方の差異にはある程度の記述がなされるが、地方間の差異は一括されているという印象を受ける。第四はアペンディクスの不備である。これには二点あり、その一つは系図が欠如していることである。「内乱期」や「カルマル同盟期」は治世者の変動が激しく、系図はその理解に不可欠であるにもかかわらず、非常に不便である⁽⁴⁹⁾。もう一つは文献目録の分類が大雑把なことである。各部ごとに、一次史料、総説、二次文献の三段階に分けて羅列されているが、政治史、制度史、経済史などという下位分類がなされているわけではないので、目的の文献を見つけるのが困難である。また、史料論が欠如しているために、列挙された一次史料がどのような類型にあたるのか、タイトルからだけでは判断できないものも多い。

3. 批判と新動向：第一部から第三部を中心に

前章では本書全体に関わる特徴と問題点を指摘したが、本章では評者の専門とする12世紀以前のスカンディナヴィア世界、本書で言えば第一部から第三部にかけてのなかから、三つの問題に限定して論じる。

(1) 地域と政治統合の問題

すでに批判してきたように、本書は全体として地域の問題にそれほどの関心を払っているようには見えない。しかしながらこの問題は各国の政治統合を考える際には等閑視できない要素であると評者は考えている。周知のように12世紀初頭段階でのデンマーク王国は、ユラン半島、島嶼部、スカンディナヴィア半島南端部から構成され、シェラン島のロスキレならびに大司教座のあるルンドを統治拠点として機能していたが、このような国家構造は所与のものではない。つまりそれは10世紀前半のゴーム老王にはじまるイエリング王朝による歴史的形成物なのである。その形成過程において看過しえないのは地域の問題であり、それには自然的要素であるデンマークの地理的特性と、人為的要素であるそこに割拠する在地有力者の存在がある。当該時代を叙述するI・スコッゴーア＝ペターセンによる第8章(b)節には、この二つの視点が決定的に欠如している。

地理的特性についての考察からはじめたい⁽⁵⁰⁾。いま、中世デンマーク王国はユラン半島、島嶼部、スカンディナヴィア半島南端部から構成されていると述べたが、いずれも一様な平野部であり、周囲を海に囲繞されているという点は共通している。それは物資の交換や人員の移動に際しては陸路と同時に海路が常に必要とされるということを意味しており、私たちはこの点に注目しなければならない⁽⁵¹⁾。一つは、324頁の地図I4から一目で理解されるように、人口集住地、とりわけ初期都市の多くが、海からのアクセスが容易な場所に位置していることである。ある種の経済力ならびに海外からの情報が集中する都市を把握することは王権の収入を安定させるために不可欠であるが、実はデンマークにおける都市の成立過程はユラン半島南部からユラン半島北部ならびに島嶼部、そしてスカンディナヴィア半島南端部へという一定の方向性があり、それはイエリング王朝の統治領域拡大過程と軌を一にしている。二つ目は海峡の支配である。デンマークは、北海とバルト海が交錯するその端境にちょうど位置しているが、その間にスカゲラック、カテガット、小ベルト、大ベルト、エーアスンをはじめとする多数の海峡を擁している。これら海峡の安全を保持することは最終

的にエーアスン海峡を挟む地域を治世の中核とするデンマーク王朝にとって重要条件であるが、ハーラル青歯王時代に建設された四つもしくは五つの軍事要塞はこれら海峡を望む地所に位置している⁽⁵²⁾。叙述史料から確認されるわけではないので確言は難しいが、少なくとも建設主導者であるハーラル王にあつてはそれらの要塞に統治領域を分断する諸海峡の監視施設としての機能を担わせていた可能性は考慮されてもよい⁽⁵³⁾。以上のような都市ならびに要塞を維持するために不可欠となるのは、有効に機能する海事力を王権が保持することであり、これが第三点となる。のちに「レイザング」と呼ばれる海事軍役制度がヴァイキング時代後期のデンマークに存在していたかどうかはなお議論があるが⁽⁵⁴⁾、当該時代に用途に応じた様々なタイプの船舶をデンマーク王権が利用していたことは叙述史料ならびに考古学の成果から明らかとなっている。以上の指摘により、イエリング王権による政治統合から地理的要件としての海の問題を排除することは困難であることがわかる。

次に在地有力者の問題に触れてみたい。この点に関してすでに別稿で指摘したように、10世紀初頭のデンマークはいくつもの有力豪族が割拠する状態にあつた⁽⁵⁵⁾。本稿ではそれを詳述するだけの余裕はないが、9世紀最末期の段階においてデンマークは少なくともフエン島とシェラン島の間で大きく二つに分かれていることがアルフレッド大王の宮廷で報告されている⁽⁵⁶⁾。しかしながらその他の叙述史料、ルーン碑文、墓地、発掘された遺構等の分布を考慮するならば、ユラン半島の内部でさえいくつかの勢力に分割されていることが推測され、また強権を誇つたとされるクヌート王の時代になつても王権に匹敵する有力豪族がデンマーク内には割拠していたことが確認される。彼のイングランド治世で重要な役割を果たすソルケルや後のデンマーク王となるスヴェン・エストリズセンの父であるウルヴなどはその代表的な例であるが⁽⁵⁷⁾、ハーラル治世末期以降幾度か確認される王権に対する反乱は、こうした有力豪族のもつ潜在力の証明であるということが出来る。評者の見解にしたがえば、そもそもデンマークに強固な地盤を持たなかつたと考えられるイエリング

王朝による政治統合の過程とは、まさにこうした有力豪族との合従連衡による、紆余曲折を経た過程であったと理解される⁽⁵⁸⁾。なお地域有力者の問題は盛期中世における地域法、地域集會、内乱等の問題に直結すると考えられるので、ヴァイキング時代とその後の時代の連続性（または断絶）に関しては、双方の専門家による共同作業が必要となることを言い添えておきたい⁽⁵⁹⁾。

(2) 他者との接触の問題

地図を参照すれば一目瞭然であるが、スカンディナヴィア世界は閉じられた世界ではない。ノルウェーは北海を挟んでブリテン諸島をはじめとする西方世界と、デンマークは南方の大陸世界と、スウェーデンは東方のスラヴ、イスラーム、ビザンツ世界と繋がっている。そうであるならば、陸路もしくは海路を通じて異文化が流入してくるのは必然であり、スカンディナヴィア世界の形成もそのような外部との交渉を抜きにして論じることができない。また、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンは、それぞれが独立して政治統合を果たしたわけではなく、相互接触を繰り返すことによってその姿形を整えていったと考えられる。しかしながら、本書の該当部分を読む限りではそのような視点が必ずしも反映されているとは言えない。以下では近年の研究動向に助けを得ながら評者の見解を示したい。

まずは外部との交渉を考えてみたい。スカンディナヴィア世界は鉄器時代より中世を通じて、独特の普遍性を周囲に伝播させる潜在力をもつ「帝国」を意識する位置にあった。つまり、直接的にユラン半島と接触する西ローマ帝国であり、フランク帝国であり、オットー一世以降のドイツ帝国であり⁽⁶⁰⁾、ロシアを挟んで間接的にスカンディナヴィア半島と連絡するビザンツ帝国である。もちろんそれぞれの「帝国」の内包する普遍性には差異があるため一括して論じることがあるが、ただ一点共通することがある。それは、いずれの国であれ北歐史学はこれら「帝国」との接触から産み出されるはずの影響を、過小評価してきたことである⁽⁶¹⁾。その理由の一つは北歐の学界が「ゲルマン性」を前面に押し出す嘗てのドイツ学界の強い影響下にあったことであり、もう一

つは、第一章の議論とも関わるが、少なからぬ歴史家が、自国の歴史の単線的かつ自生的な展開を強調し、外部の影響を排除してきたことである。

しかしながら、こうした現状はここ二十年間の研究において大きく覆されつつある。まずは西ローマ帝国との関係であるが、注目すべき成果として、北歐内で発見されたローマ製物品を体系的に分析したU・ロン・ハンセンによる大著と⁽⁶²⁾、ヨーロッパ学術財団の後援を得た大型プロジェクトである「ローマ世界の変容」を挙げなければならない⁽⁶³⁾。とりわけ後者のプロジェクトは合計13巻にのぼる報告論集を出版しており、そこには北歐に関わる論考も複数含まれるが、なかでも鉄器時代の北歐における権力統合に関して多くの成果を発表しているL・ヘゼアガーとU・ネスマンによる成果が目を引き⁽⁶⁴⁾。両者の議論の根底には、鉄器時代においてすでに外部からの富の流入を効果的に蓄積した階層が権力基盤を築いていたとする考えがあり、それは「平等主義的な農民」像とは真っ向から対立する⁽⁶⁵⁾。このような研究現状の焦点となっていたのはフン島南部で発掘されたメロヴィング期の交易拠点とされるグズメルネボー複合遺構であるが、現在では同等の機能をもったと考えられる遺構が北歐各地で発見されており、外部世界との接触に関する議論はさらに進展する気配を見せている⁽⁶⁶⁾。紀元前500年から紀元後800年までを扱ったB・ミューレによる第三章は、そのような近年の成果を十分に吸収し、明解な議論を展開している。しかしながらローマ世界からの顕著な影響を示す具体的遺物であるブラックアットに関してまったく触れられていない点は、問題があるように思われる⁽⁶⁷⁾。

その一方で、フランク帝国、ドイツ帝国、ビザンツ帝国との接触に関して論じられた箇所は極めて少ない。これら諸帝国と北歐との接触を考えるにあたって最大の問題はキリスト教導入問題であり、この点に関してはソーヤー夫妻による第7章が周到な議論を進めている⁽⁶⁸⁾。しかしながら、ポスト・ローマ期以降のスカンディナヴィアと諸帝国との接触問題は、キリスト教問題に限定されるわけではなく、外交、交易、文化伝播等多岐にわたる⁽⁶⁹⁾。たとえば、フランク帝国領内におけるスカンディナヴィア人有力者の役割をサーヴェ

イしたS・クーブランド⁽⁷⁰⁾、ヨーロッパ各地に分布するスカンディナヴィア製工芸品を論じたE・ロエスダール⁽⁷¹⁾、フランク帝国とビザンツ帝国の間に介在したスカンディナヴィア人をめぐるJ・シェパードらの研究は重要であるが⁽⁷²⁾、叙述に反映されているようには見えない。

もちろん、外部世界は帝国だけに限定されるわけではない。地理的な関係からスウェーデンならびにデンマークと密接な関係を持つスラヴ世界と、ノルウェーならびにデンマークに面するブリテン諸島にも注意を向けねばならない。前者に関しては、かねてより現ポーランドの西北端に位置すると考えられるヴォリンをめぐる議論が活発であったが、さらに広い視野でスラヴ世界とスカンディナヴィアの関係を論じたW・ドゥチュコの研究が注目される⁽⁷³⁾。後者に関しては、とりわけサットン・フーとデーローに研究が集中しており、歴史学者よりも考古学者による成果公表が目立つ⁽⁷⁴⁾。またイングランド周縁部とスカンディナヴィア人との関係においても、若手歴史家により旧説の見直しが図られている⁽⁷⁵⁾。例えば、ノルウェー王権との関係の深いエーリク血斧王とダブリン＝ヨーク王国との関係を再考したC・ダウナムや⁽⁷⁶⁾、アイルランド海周辺のスカンディナヴィア人の動向をサーヴェイしたC・エッチングムの研究が注目されよう⁽⁷⁷⁾。以上の論考で扱われる一連の事例は、海を隔てた地域と北歐との往来が常態化していたことを示唆していると考えられる⁽⁷⁸⁾。

最後に北歐三国の関係についても述べておきたい。本書中においても中世後期に三国が緊密に結びついていたことは記されているが、ヴァイキング時代以前においても同様のことが言える。とりわけヴァイキング時代後期のデンマーク、ノルウェー、スウェーデンの関係は数年間隔で変動しており、それぞれが無関係のまま政治統合を果たしたわけではない。たとえば、評者の見解によれば、イェリング王権のハーラル青歯王は当初スヴェア王権と緊密な関係を築いていたが、その治世末期にエーリク勝利王が台頭するや両国間に亀裂が入り、ハーラルの息子スヴェン叉髭王は追放されることになった⁽⁷⁹⁾。しかしながら995年にエーリクが死亡した後、スヴェンは敵対者の寡婦

を妻として迎え、数年後にはエーリクの息子ウーロヴ・シェットコーヌングとともに紀元千年のスヴオルドの戦いでノルウェーのオーラヴ・トリュグヴァソンに勝利している⁽⁸⁰⁾。同様の複雑さはデンマークとノルウェー間においても、またノルウェーとスウェーデン間においても観察される。10世紀以降のスカンディナヴィア世界には、おそらく一王権が突出した影響力を発揮することを回避するような独自の政治システムの存在が予想され、一国の政治統合の問題を扱う際にもそうしたシステムを考慮しなければ王権による政治行為の意図を見誤ることになることを指摘しておきたい。

(3) 文化独自性の問題

本節では北歐文化の独自性について考えてみたい。文化とは何かとの問いに答えを出すことは困難であり、極端になるとかつての「原ゲルマン性」のごとき抽象的な理想型に帰着しかねない。しかしながら、対象地域のもつ独自性の問題は、政治史、行政史、経済史、交渉史等歴史学全ての分野に関わるものであり、単なる地域研究にとどまらない、ヨーロッパ史におけるスカンディナヴィア世界の位置を決定する要因となるために、等閑視できない。

本書の第六章はヴァイキング時代の文化に関する総説であるが、ヴァイキング研究とアイスランド研究の第一人者が共同執筆しており、水準の高い章となっている。当該時代は、それ以降の時代と比べて言語の差異が少なく、相対的に「スカンディナヴィア文化」もしくは「ヴァイキング文化」と呼びうるものが、スカンディナヴィア全域で看取される時代であったことが前提とされている。本章の議論を敷衍しながら、三点論じてみたい。

一つは、船舶の問題である。本章1節で評者は、スカンディナヴィア世界においては、その自然地理的条件から船舶技術が大きな意味を持つことを強調した。遠征、戦闘、交易、日常生活いずれの場面においても船舶は必須であり、ロスキレフィヨルドのスクルゼレウ沈船群からも理解されるように、その目的用途に応じて規模、形態、外観において様々なタイプの船舶が建造された⁽⁸¹⁾。しかしながら北歐における船舶の問題は、第六章で

論じられるような実生活上のレベルに留まるものではなく、精神史上も大きな意味を持っていると考えられる。ここで私たちが注目するのは「船葬墓」と呼ばれる、スカンディナヴィア世界特有の、実際の船上もしくは舟形に並べられた石列群中に遺体を葬る埋葬形式である⁽⁸²⁾。ローマ期以前からの形式であるが、多数は民族移動期からヴァイキング時代にかけてのものであり、ウップランドのヴァルスイェルゲ墓群やヴェストフォルのオーセベリ遺跡が著名である⁽⁸³⁾。このような埋葬慣習からは、北欧人の死後観念と船との間に深い関係のあることが推測されるが⁽⁸⁴⁾、M・ミューラー＝ヴィツレは1995年の論考において、船葬墓はその分布と年代に地域ごとの偏差があり、その相関関係を明らかにすることが必要である、と指摘している⁽⁸⁵⁾。

二つ目は、スカルド詩の問題である。スカルド詩は最も特徴的なヴァイキング文化の一つであるが、20世紀をつうじてのその研究対象は、表現技法や用語法など文学史上もしくは言語史上の役割に限定されていたように思われる⁽⁸⁶⁾。しかしながら、近年、歴史学的に大きな意味をもちうる方向性の研究を認めることができる。一つは、詩そのものではなく謡い手であるスカルド詩人に関する研究である⁽⁸⁷⁾。個人史もしくは人物誌研究の蓄積はそれほど多いわけではないが⁽⁸⁸⁾、11世紀半ばに活躍したアルノール・ヤールスカルドの研究を公にしたD・ウェイリーは、その好例である⁽⁸⁹⁾。もう一つは、スカルド詩の謡われたコンテクストをめぐる研究である。クヌート王の讃仰詩がどのような条件下で成立したのかを網羅的に検討したM・タウネンドや⁽⁹⁰⁾、12、13世紀アイスランド文筆文化の中でスカルド詩のもつ役割を解明したG・ノルダルの研究が該当する⁽⁹¹⁾。スカルド詩とは王侯にとっての娯楽である一方で彼らの業績を記憶させる役割をもっており、政治文化にも深く関わっている⁽⁹²⁾。こうしたスカルド詩人に関する研究は、スカルド詩のもつ社会的意味をより鮮明なものとし、北欧文化の理解を重層的なものとする可能性を秘めている。なお、2006年より、英訳と註釈を伴う新しいスカルド詩校訂版の刊行が予定されており、それによってこれまで解釈が難解であるために避けられていたスカルド

詩の歴史学的研究も加速するものと思われる⁽⁹³⁾。

三つ目はルーン碑文の問題である。従来は言語学者による文言の解釈や語用をめぐる研究が中心であり、歴史学における碑文の利用といえば、解読された碑文の中から「歴史的ルーン碑文」とよばれる、人物が特定できる碑文を文献史料の補助として用いることが主であった⁽⁹⁴⁾。しかしながら近年歴史学者の側からこの碑文に対して積極的なアプローチが見られる。一つは、碑文に記される情報をもとにして海外におけるスカンディナヴィア人の活動を論じた研究であり、J・ジェッシュによる大著と⁽⁹⁵⁾、M・ラーションによる近作がある⁽⁹⁶⁾。いずれも、スカンディナヴィア人の海外展開、つまり「ヴァイキング活動」の碑文に基づいた研究であるが、バイアスの多い叙述史料ではなく碑文を根拠としているため、これからの研究の基盤となりうる⁽⁹⁷⁾。もう一つは、碑文の内容もさることながら碑文を建てるという慣習そのものに目を向けたB・ソーヤーの研究である⁽⁹⁸⁾。スカンディナヴィア全域で10世紀から12世紀半ばまでに建立された、断片を含めて計2307基の碑文を、地域、作成年代、内容等によって分類し、碑文慣習の特徴を抽出しようとするものである⁽⁹⁹⁾。彼女によれば、碑文は死者を顕彰するのみならず、その碑文を建てた人物をも記念し、関係者の富と地位を公知する機能をもつ⁽¹⁰⁰⁾。こうした機能に注目しながら、財産所有形態、女性の地位、キリスト教の受容ルート、王権と在地有力者との関係のような、文献史料からは知ることが困難な情報を巧みに引き出している。

おわりに

第一章では史学史上における本書の位置づけを、第二章では内容紹介とその特徴を、第三章では評者の専門に関わる範囲での批判もしくは展望を展開した。

確かに本書は現在における北欧中世史学の到達点である。評者の指摘するような問題はあるにせよ、この英語で書かれた通史は、北欧中世史に関心のある全ての研究者にとって必携であるし、なじみの薄い分野があれば本書の該当箇所を参照す

ることで必要な知識を得ることができるだろう。おそらく、北欧語から情報を得ることができない場合は、本書の記述を拠り所として研究が進められることが予想される。

しかしながら第三章で見たように、個々の論点において研究は進展している。しかしこの場合、研究史が厚みを増しているだけではない。学知の生産の仕方変わりつつあるのである。北欧中世史研究を専門とする北欧外の学者は増え続け、かなりの北欧人学者が英語をはじめとする外国語で研究を発表するようになった。北欧内外の学者が会するシンポジウムもたびたび開催され、インターネットを通じて得られる情報も飛躍的に増大した⁽¹⁰¹⁾。研究者と研究内容の交流がさかんになることで、ヨーロッパ史の中で北欧史を確認することも、北欧史を含めたヨーロッパ史を構想することも、以前に比べれば遙かに容易になっている。現在の若手らによって数十年後書かれるべき新しい通史は、このような現況を反映したものとなるだろう⁽¹⁰²⁾。

- (1) 小澤実「北欧中世史研究の道宝箱」『クリオ』17 (2003)、57頁。北欧外の研究者によるこれら三つの通史は発行年順に、L. Musset, *Les peuples scandinaves au moyen âge*, Paris 1951.; B. & P. H. Sawyer, *Medieval Scandinavia: From Conversion to Reformation circa 800-1500*, Minneapolis 1993.; M. Kaufhold, *Europas Norden im Mittelalter: Die Integration Skandiaviens in das christliche Europa*, Darmstadt 2001.
- (2) 内容は古くなったとはいえ、ミュッセによる通史は、碩学による個人作品としての統一感がある。なお近年ソーヤー夫妻は、ベルリンのジードラー社によるシリーズ「ドイツ人とヨーロッパ中世」に『ヴァイキングの世界』と題する一卷を寄せた。このシリーズのその他の巻はドイツに接する東ヨーロッパ世界、西ヨーロッパ世界、イタリアを扱っている。ただし対象とする時代は12世紀までとなっている。B. & P. H. Sawyer, *Die Welt der Wikinger*, Berlin 2002.
- (3) 例えば、H. Koht, *The Scandinavian king-*

doms until the end of the thirteenth century, *The Cambridge Medieval History* 6, Cambridge 1929, p. 362-92.; S. Bolin, *Medieval agrarian society in its prime: Scandinavia*, *The Cambridge Economic History of Europe* 1, 2 ed., Cambridge 1966, p. 633-59.; E. Lönnroth, *The Baltic countries*, *The Cambridge Economic History of Europe* 3, Cambridge 1963, p. 361-96. もちろんそれぞれの論考には、いまなお読み返すに値する質の高さがある。

- (4) 博士号取得論文は、*Konge og gode menn i norsk riksstyring ca.1150-1319*, Oslo 1972.
- (5) S. Bagge, S. H. Smedsdal & K. Helle (red.), *Norske middelalder dokumenter*, Oslo 1973.
- (6) K. Helle, *Norge blir en stat 1130-1319*, Oslo 1974.
- (7) Id., *Kongssete og kjøpstad fra opphavet til 1536*, Oslo 1982.
- (8) Id., *Under kirke og kongemakt 1130-1350*, Oslo 1995.
- (9) Id. et alii (red.), *Norsk biografisk leksikon*, 2 ed., Oslo 1999-
- (10) 執筆者の多くはすでに公職を退いている。最若手は第24章を担当した、2005年現在グライフスヴァルト大学教授職にあるJ・E・オレセン(1950-)である。
- (11) 英語による通史ということであれば、近々完結する『新ケンブリッジ中世史』の各巻が目目される。割り当てられた頁数は少ないが、本書との重複をできる限り避けた第一線の研究者によってコンパクトに纏められている。L. Heidegger, *Scandinavia (c. 500-700 AD)*, P. Fouracre (ed.), *The New Cambridge Medieval History* I, Cambridge in press; N. Lund, *Scandinavia, c. 700-1066*, R. McKitterick (ed.), II (1995), p. 202-27.; P. H. Sawyer, *Scandinavia in the eleventh and twelfth centuries*, D. Luscombe & J. Riley-Smith (eds.), IV-II (2004), p. 290-303.; S. Bagge, *The Scandinavian kingdoms*, D. Abulafia (ed.), V (1999), p. 720-42.; S. C.

- Rowell, *Baltic Europe*, M. Jones(ed.), VI(2000), p.699-734.; T. Riis, *The states of Scandinavia, c.1390-c.1536*, C. Allmand (ed.), VII(1998), p. 671-706.
- (12) もちろん、現代にまでいたる北欧通史のなかで中世を扱った箇所はある。ただし、中世史家による北欧通史を、評者は寡聞にして知らない。近年公刊された、近世史家によるダイナミックな北欧把握の例として、H. Gustafsson, *Nordens historia: En europeisk region under 1200 år*, Lund 1997.
- (13) 「Scandinavia」と「Norden」の間には、歴史的な文脈で付与されてきた意味内容の差異があるが、本稿では特に区別を設けない。cf. 古谷大輔「スウェーデン文化の歴史的前提」『人間科学研究(神戸大学)』11-2(2004)、160-61頁。
- (14) ただし、近年の北欧ではこのような問題意識に基づいた共同研究が生まれている。例えば、K・ハストロプ編(菅原邦城他訳)『北欧のアイデンティティ(北欧社会の基層と構造3)』(東海大学出版会 1996)。原著は1992年刊である。
- (15) 村井誠人「スカンディナヴィア主義の展開」早稲田大学社会科学研究所北欧部会編『北欧デモクラシー その成立と展開』(早稲田大学出版部 1982)、5-7頁。
- (16) 「政治のスカンディナヴィア主義」は、それぞれの国家が置かれた状況によって多様な道程を辿る。詳細は、『北欧史研究』1(1982)の特集「1860年代の政治的スカンディナヴィア主義」を参照。また、「文学のスカンディナヴィア主義」に関しては、O. Springer, *Die Nordische Renaissance in Skandinavien*, Stuttgart 1936.
- (17) B. Stråth, *Scandinavian identity: A mythical reality*, Nils A. Sørensen(ed.), *European Identities: Cultural Diversity and Integration in Europe since 1700*, Odense 1995, p. 37-57.
- (18) 「古ノルド文化」観念の系譜は、「ゴート・ルネサンス」と呼ばれる16世紀の精神文化運動にまで遡って論じる必要があるが、ここではさしあたり次の文献を指摘するに留める。L. Lönnroth, *The Vikings in history and legend*, P. H. Sawyer(ed.), *The Oxford Illustrated History of the Vikings*, Oxford 1997, p. 225-49.
- (19) Stråth, *op. cit.*, p. 40.
- (20) 北欧の歴史学はナショナリズムの高揚と平行して、19世紀後半に一つの盛り上がりを見せている。これは歴史学だけの問題ではなく、同時に考古学、民俗学、文献学のような過去に関わる学問全体の動態である。ノルウェーで言えば、R・ケイサーやP・A・ムンクの存在を想起することができる。cf. O. Dahl, *Norsk historieforskning i det 19. og 20. århundre*, 4 ed., Oslo 1990. また、本稿での詳述は避けるが、行政文書をはじめとする中世史関係資料も、国家単位で刊行された。
- (21) デンマーク宮廷における近世国家史叙述の研究として、K. Skovgaard-Petersen, *Historiography at the Court of Christian IV.*, København 2002.
- (22) L・ヴェイブルとE・アロップとの間に交わされた書簡を用いた研究として、I. Floto, *Venskab: Korrespondancen mellem Erik Arup og Lauritz Weibull*, *Historisk Tidsskrift* (D) 95(1995), s. 241-97.; コペンハーゲン大学歴史研究所付属図書館に架蔵されている、*Om Nordens äldsta Historieforskning*, Lund 1931. は、著者であるS・ポリーンからのE・アロップ宛の献辞が記されていたと記憶している。
- (23) E. Arup, *Danmarks historie*, 2 bd., København 1925-32.
- (24) E. Bull, *Grunnriss av Norges historie*, Oslo 1926.; A. Holmsen, *Fra de eldste tider til 1660*, Oslo 1939.
- (25) ラウリッツとクルトのヴェイブル兄弟は、通史を執筆したことはないし、そもそも狭義のスウェーデン史家ですらない。しかしながらその方法論によりスウェーデンにおける近代歴史学研究の出発点と考えられる。この兄弟の方法論に関わる重要な研究として、L. Weibull, *Kritiska Undersökningar i Nordens historia omkring år 1000*, Lund 1911.; C. Weibull, *Saxo: Kritiska undersökningar i Danmarks historia från Sven Estridsens död till Knut*

VI, Lund 1915.

- (26) J. Danstrup & H. Koch(red.), *Danmarks Historie*, 14 bd., København 1962-66.
- (27) K. Mykland et alii(red.), *Norges historie*, 15 bd., Oslo 1976-80.
- (28) J. Rosén, *Svensk historia I: Tiden före 1718*, Stockholm 1962.
- (29) O. Olsen(red.), *Danmarkshistorie*, 16 bd., København 1988-91.
- (30) K. Helle et alii (red.), *Aschehougs Norgeshistorie*, 12 bd., Oslo 1994-98.
- (31) いくつかあるが最も信頼できるものとして、P. Ingesman et alii(red.), *Middelalderens Danmark: Kultur og samfund fra trosskifte til reformation*, København 1999.; C. Krag, *Norges historie fram til 1319*, Oslo 2000.; D. Harrison, *Sveriges historia: Medeltiden*, Stockholm 2002.
- (32) J. Brøndum-Nielsen et alii(red.), *Nordisk Kultur: Samlingsverk*, 30 bd., Stockholm 1931-56.
- (33) J. Danstrup et alii(red.), *Kulturhistorisk leksikon for nordisk middelalder fra vikingetid til reformation*, 22 bd., København 1956-78.
- (34) 彼女は『北歐文化』があまりにも専門的に過ぎ、シリーズ内の各巻のあいだに統一性も連関性もないことを問題とし、ゲルマン世界に関する著名な項目事典であるホープスの『ゲルマン古代学事典』全四巻の北歐版を企図した。G. Nora, *Kulturhistorisk leksikon for nordisk middelalder*, *Nordisk Tidskrift* 52(1976), s. 1-12.
- (35) 各項目は、デンマーク語、ノルウェー語、スウェーデン語のいずれかで執筆され、可能な限り、北歐五カ国の状況について各国の専門家が執筆している。
- (36) H. Beck et alii(hrsg.), *Reallexikon der germanischen Altertumskunde*, 2 Aufl., Berlin-New York 1973- (以下、RGA); 『北歐中世文化史事典』はホープスによる事典を目標としたと述べたが、ホープスの初版は20世紀初頭に刊行されており、すでに内容的には時代遅れのものとなっていた。
- (37) 第一巻は1973年に出版された。全34巻が予定されているこの事典の各項目は、ドイツ語もしくは英語で書かれており、論文と言っても差し支えないほど、叙述内容も参考文献も充実している。ゲッティンゲン大学内にあるホームページ (<http://www.hoops.uni-goettingen.de/hoops.htm>)からは項目サンプルもダウンロードできる。
- (38) P. Pulsiano(ed.), *Medieval Scandinavia: An Encyclopedia*, New York 1993.
- (39) 確かに政治過程の比較は数値化が容易な経済史や定住史に比べて困難であるかもしれないが、たとえば各国に見いださる「内乱」の生起構造の比較は有効であるように思われる。
- (40) 三年に一度開催される「北歐歴史家会議」でのシンポジウム報告が多い。G. Authén Blom(red.), *Urbaniseringsprosessen i Norden I: Middelaldersteder*, Oslo 1977.; *Den nordiske Adel i Senmiddelalderen: Struktur, funktioner og internordiske relationer*, København 1971.; V. Dybdahl(red.), *Hansestæderne og Norden*, Viborg 1957. 該当する章の担当者の多くは、これら論文集の寄稿者であり、今回の叙述に反映されたと考えられる。
- (41) ただし、マルクス主義歴史学がもたらした弊害については近年厳しく反省が求められている。スウェーデンに関しては、E. Lönnroth, *Svensk historieskrivning under 1900-talet*, *Historisk tidskrift* (S) 118(1998), s. 304-13.
- (42) オーフス大学とルンド大学の講座が著名であり、それぞれ *Hikuin* (1974-) と *META: Medeltidsarkeologisk tidskrift* (1979-) という機関誌を発行している。デンマーク中世考古学の歩みに関しては、N.-K. Liebgott, *Dansk middelalderarkæologi*, København 1989, s. 9-14.
- (43) 北歐内における黒死病に関する個別研究は膨大であるが、近年の総合として、D. Harrison, *Stora döden: Den värsta katastrof som drabbat Europa*, Stockholm 2000, s. 349-412.
- (44) 廃村に関しては、S. Gissel et alii(eds.), *De-*

- sertion and Land Colonization in the Nordic Countries c. 1300-1600, Stockholm 1981.
- (45) 例えば, R. McKitterick, Introduction: Sources and interpretation, Id. (ed.), *The New Cambridge Medieval History II* Cambridge 1995, p. 3-17.
- (46) 本書における例外的記述は、I・スコウゴア=ペターセンによる、第8章(b)節と第12章(b)節である。
- (47) 代表的論者は、スウェーデンのL・ヘルマンソンである。彼の12世紀デンマークの政治文化に関する博士論文は、G・アルトホーフのオート朝研究の手法にヒントを得ている。L. Hermanson, *Släkt, vänner och makt: En studie av elitens politiska kultur i 1100-talets Danmark*, Göteborg 2000. ; Id., *Makten, individen och kollektivet: Ett alternativt perspektiv på det danska 1100-talets politiska historia*, P. Carelli et alii(red.), *Ett annat 1100-tal: Individ, kollektiv och kulturella mönster i medeltidens Danmark*, Göteborg 2004, s. 61-99.
- (48) 1198年までのルンド大司教管区の司教一覧は、H. Kluger(cur.), *Series episcoporum ecclesiae catholicae occidentalis ab initio usque ad annum 1198: IV-2, Archiepiscopatus Lundensis*, Stuttgart 1992. ; 改訂が必要であるが、ノルウェーのみは中世をつうじての全司教リストを手にするができる。O. Kolsrud, *Den norske Kirkes Erkebiskoper og Biskoper indtil Reformationen(Diplomatarium Norvegicum XVII-B)*, Christiania 1913.
- (49) どういうわけか『中世事典』の巻末付録にも北欧諸王家の系図はない。史料上の不確定要素が多いためかもしれないが、ヨーロッパ中世史の枠内における北欧研究の現状を反映している。Stammtafeln, Herscher- und Papstlisten, *Lexikon des Mittelalters IX*, Stuttgart 1999.
- (50) N・ブロムクヴィストによる近著は、中世盛期におけるカルマル海峡、ゴットランド島、ドヴィナ川下流域のもつ地政学的意味を論じており、本節との関連において興味深い。N. Blomkvist, *The Discovery of the Baltic: The Reception of a Catholic World-System in the European North(AD 1075-1225)*, Leiden 2005, p. 277-99.
- (51) 北欧の都市と水域との関係は、中世後期の都市を論じるG・ダールベックによる第20章において指摘されている。邦文による関連研究として、根本聡「ストックホルムの成立と水上交通—中世期メーラレン湖地方の商業関係—」『歴史学研究』751(2001)、56-67頁。
- (52) ハーラル期の要塞としてはほぼ確実視されているのは、ユラン半島北部リムフィヨルド内のアッガースポー、同じくユラン半島北部マリアーフィヨルド奥のフィアカット、フュン島北部のノンネバッゲン、シェラン島西部のトレレポーの四つである。スコーネ南端のトレレポリにも同型の建造物があるが、それが前期四つの要塞と同目的のものであるかどうかは現在では見解が分かれている。
- (53) 初期デンマークにおける海防問題に関しては、A. N. Jørgensen, *Sea defence in Denmark AD 200-1300*, Id. & B. L. Clausen(eds.), *Military Aspects of Scandinavian Society in a European Perspective AD 1-1300*, København 1997, p. 200-09.
- (54) ヴァイキング時代デンマークにこの制度があったとするR・マルムロースと、なかったとするN・ロンの論争がある。N. Lund, *Lið, leding og landeværn: Hær og samfund i Danmark i ældre middelalder*, Roskilde 1996, s. 110-125.
- (55) 小澤実「ゴームの足跡を求めて ヒストリオグラフィと文字資料の中のゴーム老王」『北欧史研究』21(2004)、9頁。
- (56) C. Müller-Boysen, >on thæt bæcbord Denamearc<; Politische Geographie von Bord eines Wikingerschiffes aus betrachtet, W. Paravicini(hrsg.), *Mare Balticum*, Sigmaringen 1992, S. 21-37.
- (57) ソルケルとウルヴに関してはさしあたり、A. Campbell(ed.), *Encomium Emmae Reginae*, with a supplementary introduction by S. Keynes, Cambridge 1998, p. 73-87.

- 58) 小澤「ゴームの足跡を求めて」、6頁。
- 59) 以上の問題は第8章(b)節に留まるものではなく、多少なりとも他の地域、他の時代にも該当する。もちろん、第8章(c)節のように、地方有力者の動向に注意を払った章や、第20章のように自然地理条件を考慮した章もある。しかしながら、地理学者の力を借りてまで第1章で詳述されたスカンディナヴィア世界の多様な地理的特性は、歴史的展開と絡み合う以前に捨象される傾向にある。
- 60) 政治史的な編年を用いるならば、西ローマ帝国とカロリング帝国、カロリング帝国とドイツ帝国との間には、皇帝の存在しない空隙がある。しかしながら現在の研究ではそれぞれをポスト・ローマ期、ポスト・フランク期と称して、それ以前に存在した「帝国」の影響が存続していたとする見解を認めることができる。
- 61) 例外は、ルンド大学教授であったS・ボリーンである。歴史家であると同時に古銭学者でもあった彼は、ローマ、イスラーム、ビザンツといった外部世界と北欧との接触について戦前より注目し、顕著な成果を上げていた。cf. S. Bolin, *Ur penningens historia*, Stockholm 1962。しかしながら彼の成果を継承したのは、北欧人研究者ではなく、リーズ大学教授であったP・ソーヤーであった。商業の担い手としてヴァイキングの姿を西ヨーロッパ学界に周知させることになったソーヤーの名著は、論拠となる古銭データの大部分を、ボリーンから入手している。P. H. Sawyer, *The Age of the Vikings*, 2 ed., London 1972, p. 86-119。
- 62) U. Lund Hansen, *Römischer Import im Norden: Warenaustausch zwischen dem Römischen Reich und dem freien Germanien*, København 1987。
- 63) I. Wood, The European Science Foundation 'programme on The Transformation of the Roman World and Emergence of Early Medieval Europe, *Early Medieval Europe* 6(1997), p. 217-27。
- 64) L. Hedeager, *Asgard reconstructed?* Gudme - a 'central place' in the North, M. de Jong & F. Theuws(eds.), *Topographies of Power in the Early Middle Ages(TRW6)*, Leiden 2001, p. 467-507.; Id., Migration period Europe: The formation of a political mentality, F. Theuws & J. L. Nelson(eds.), *Rituals of Power: From Late Antiquity to the Early Middle Ages(TRW8)*, Leiden 2000, p. 15-57.; U. Näsman, Exchange and politics: The eighth-early ninth century in Denmark, I. L. Hansen & C. Wickham(eds.), *The Long Eighth Century(TRW11)*, Leiden 2000, p. 35-68.; Id., The Justinianic era of south Scandinavia: An archaeological view, R. Hodges & W. Bowden(eds.), *The Sixth Century: Production, Distribution and Demand(TRW3)*, Leiden 1998, p. 255-78。
- 65) 評者自身は、下部構造決定論へ回帰しているかのように見える一部の考古学者による因果解釈には賛成できない。
- 66) グズメに関しては、H. Thrane, Gudme, *RGA* 13(1999), S. 142-8。また、近年の考古学的見解を巧みに纏めあげたものとして、高木一輝『民族移動期におけるグズメ社会：南スカンディナヴィア 首長制社会から初期国家への展開』(名古屋大学大学院文学研究科修士論文 2003)。
- 67) ブラクテアットとは、「民族移動期もしくはメロヴィング期に作成された、一面に図像の刻印された円形の吊り装身具」である。後期ローマにおける皇帝メダイオンもしくは貨幣がモデルとされ、主としてスカンディナヴィア南部で発見されている。E. Munksgaard et alii, *Brakteaten*, *RGA* 3(1978), S. 338-61.; なお、近年の重要なモノグラフとして、M. Axboe, *Die Goldbrakteaten der Völkerwanderungszeit: Herstellungsprobleme und Chronologie*, Berlin 2004。
- 68) ソーヤー夫妻よりも長期的かつ広い視野で同じ問題を論じているのは、P. Brown, *The Rise of Western Christendom: Triumph and Diversity, A.D. 200-1000*, 2 ed., Oxford 2003, p. 463-88。
- 69) このような観点からの興味深い美術史的研究

- として、H. Vierck, *Imitatio imperii und interpretatio Germanica vor der Wikingerzeit*, R. Zeitler(hrsg.), *Les pays du Nord et Byzance (Scandinavie et Byzance)*, Uppsala 1981, p. 64-113.
- (70) S. Coupland, From poachers to gamekeepers: Scandinavian warlords and Carolingian kings, *Early Medieval Europe* 7(1998), p. 85-114.
- (71) E. Roesdahl, Cammin-Bamberg-Prague-Lèon: Four Scandinavian Objects d'Art in Europe, A. Weese(hrsg.), *Studien zur Archäologie des Ostseeraumes: Von der Eisenzeit zum Mittelalter. Festschrift für Michael Müller-Wille*, Neumünster 1998, S. 547-54.
- (72) J. Shepard, The Rhos guest of Louis the Pious: whence and wherefore?, *Early Medieval Europe* 4(1995), p. 41-60.
- (73) W. Duczko, *The Viking Rus: Studies on the Presence of Scandinavians in Eastern Europe*, Leiden 2004. また、M. Roslund, *Gäster i huset: Kulturell överföring mellan slaver och skandinaver 900 till 1300*, Lund 2001.; 角谷英則「ピルカの史的役割—ヴァイキング時代のスウェーデン・ロシア関係—」『環バルト海研究会第4回現地調査報告書』(2005)、45-53頁。
- (74) サットン・フーに関しては、本年中に発掘責任者による概説書が公刊される予定である。M. Carver, *Sutton Hoo: A Seventh-Century Princely Burial Ground and its Context*, London in press. デーンロー研究に関しては、二冊の論文集だけをあげておきたい。D. M. Hadley & J. D. Richards(eds.), *Cultures in Contact: Scandinavian Settlement in England in the Ninth and Tenth Centuries*, Turnhout 2000.; J. Graham-Campbell et alii(eds.), *Vikings and the Danelaw: Select Papers from the Proceedings of the Thirteenth Viking Congress*, Oxford 2001.
- (75) スカンディナヴィア史におけるダブリン=ヨーク王国の重要性は認識されているものの、近年北欧側からの研究はほとんど無く、基本図書とされるA・スミスの研究書も、資料の用い方に深刻な欠陥があるとされてきた。A. P. Smyth, *Scandinavian York and Dublin*, 2 vols., Dublin 1975-79. 本書に対する批判として、D. Ó Corrain, High-kings, Vikings and other kings, *Irish Historical Studies* 21(1979), p. 283-323.
- (76) C. Downham, The chronology of the last Scandinavian kings of York, AD 937-954, *Northern History* 40(2003), p. 25-51.; Id., Eric Bloodaxe - axed? The mystery of the last Scandinavian king of York, *Medieval Scandinavia* 14(2005) in press.
- (77) C. Etchingham, North Wales, Ireland and the Isles: the Insular Viking zone, *Peritia* 15(2001), p. 145-87.
- (78) こうした国家間もしくは地域間往来は、スカンディナヴィア各地の権力統合においても、大きな意味を持っていた。小澤「ゴームの足跡を求めて」、6頁。
- (79) 小澤実「エーリク勝利王と紀元千年直前のバルト海世界」『史学雑誌』113-7(2004)、1-36頁。
- (80) この間の事情に関して評者は現在検討中であるが、さしあたり、C. Krag, *op. cit.*, s. 57-59.
- (81) O. Crumlin-Petersen, Ship types and sizes AD 800-1400, Id.(ed.), *Aspects of Maritime Scandinavia AD 200-1200*, Roskilde 1991, p. 69-82.
- (82) M. Müller-Wille et alii, Bootgrab, *RGA* 3(1979), S. 249-86.
- (83) 現在私たちは、M・ミュラー=ヴィッレとT・カペッレによる包括的な船葬墓カタログを手にすることができる。M. Müller-Wille, Bestattung im Boot: Studien zu einer nordeuropäischen Grabsitte, *Offa* 25-26(1968-69), S. 5-203.; T. Capelle, Schiffsetzungen, *Praehistorische Zeitschrift* 61(1986), S. 1-63.; 角谷英則「ヴェンデルとヴァルスイエーデススウェーデン・ウップランド地方の二大船葬墓群—」『環バルト海研究会第2回現地調査報告書』(2001)、7-12頁。
- (84) 北欧神話のラグナロクのモチーフに、海との

- 深い関わりを見る古典的研究として、A・オリック(尾崎和彦訳)『北欧神話の世界 神々の死と復活』(青土社 2003)、27頁。
- ⑧5 M. Müller-Wille, Boat-graves, old and new views, O. Crumlin-Petersen & B. Munch Thye(eds.), *The Ship as Symbol in Prehistoric and Medieval Scandinavia*, København 1995, p. 101-09.
- ⑧6 最新の概観的研究として、M. Clunies-Ross, *A History of Old Norse Poetry and Poetics*, Cambridge 2005.; D. Whaley, Skaldic poetry, R. McTurk(ed.), *A Companion to Old Norse-Icelandic Literature and Culture*, Oxford 2005, p. 479-502. もちろん、文学もしくは文献学的研究も依然として重要である。論争的であるが、近年の貢献として、K. E. Gade, *The Structure of Old Norse Drøttkvætt Poetry*, Ithaca 1995.
- ⑧7 スカルド詩人が実際に何人程度存在したのかわからないが、F・ヨンソンによって11世紀に作詩したと分類される者だけで79人にのぼる。F. Jónsson(red.), *Den norsk-islandske Skjaldedigtning*, B-I, København 1912.
- ⑧8 以前にも重要な研究は散発的にあった。G. Turville-Petre, *Haraldr the Hard-ruler and his Poets (The Drothea Coke Memorial Lecture)*, London 1966.; B. Fidjestøl, *Det norrøne fyrstediktet*, Øvre Ervik 1982.
- ⑧9 D. Whaley, *The Poetry of Arnórr jarlaskáld: An Edition and Study*, Turnhout 1998.
- ⑨0 M. Townend, Contextualizing the *Knútsdrapur*: skaldic praise-poetry at the court of Cnut, *Anglo-Saxon England* 30(2001), p. 145-79.
- ⑨1 G. Nordal, *Tools of Literacy: The Role of Skaldic Verse in Icelandic Textual Culture of the Twelfth and Thirteenth Centuries*, Toronto 2001.
- ⑨2 カロリング宮廷における政治詩の役割を論じたP・ゴドマンの研究が想起される。P. Godman, *Poets and Emperors: Frankish Politics and Carolingian Poetry*, Oxford 1987.
- ⑨3 この計画に関する詳細なデータの掲載されたホームページは、編者の一人であるM・クリュニーズ・ロスの勤務するシドニー大学文芸学部に置かれている。Skaldic Poetry of the Scandinavian Middle Ages: A New Edition (<http://www.skaldic.arts.usyd.edu.au/>). また、M. Clunies-Ross, *op.cit.*, p. 1-28.
- ⑨4 歴史的ルーン碑文に関しては、E. Wessén, *Historiska runinskrifter*, Stockholm 1960.
- ⑨5 J. Jesch, *Ships and Men in the Late Viking Age: The Vocabulary of Runic Inscriptions and Skaldic Verse*, Woodbridge 2001.
- ⑨6 M. G. Larsson, *Runstenar och utlandsfärder: aspekter på det senvikingatida samhället med utgångspunkt i de fasta fornlämningarna*, Stockholm 1990.; マツツ・G・ラーション(荒川明久訳)『悲劇のヴァイキング遠征 東方探検家イングヴァールの足跡1036-1041』(新宿書房 2004)。
- ⑨7 ただし、類似の主題を扱った先駆的研究として、A. Ruprecht, *Die ausgehende Wikingerzeit im Lichte der Runeninschriften*, Göttingen 1958.
- ⑨8 B. Sawyer, *The Viking-Age Rune-Stones: Custom and Commemoration in Early Medieval Scandinavia*, Oxford 2000.
- ⑨9 B・ソーヤーの分析を支える先駆的研究として、R. Palm, *Runor och regionalitet: Studier av variation i de nordiska minnesinskrifterna*, Uppsala 1992. B・ソーヤーによる研究は歴史的関心が高く、碑文慣習を政治動向や社会変動と結びつけようとする傾向が強い。ただし、評者は必ずしも彼女の結論に同意する者ではない。批判の一例として、小澤「ゴームの足跡を求めて」、2-3頁。
- ⑩0 B. Sawyer, *op. cit.*, p. 146-7.
- ⑩1 たとえばノルウェーでは、中世史研究に不可欠の史料群をデータベース化しつつあるDokumentasjonsprosjektet(<http://www.d-okpro.uio.no/>)を見よ。
- ⑩2 本稿の原初的構想の一部は、2002年12月21日に早稲田大学で開催されたバルト＝スカンディナヴィア研究会での口頭発表「北欧中世史学の現在」に遡る。発表の機会を与えてくれた研究

会と、司会者であった村井誠人早稲田大学教授にこの場を借りてお礼を申し上げるとともに、適切な批判で本論考執筆者の誤りを訂正してくれた参加者各位にも感謝する。また、本稿の審査にあたった匿名査読者、入手困難な文献を提供してくれた古谷大輔大阪外語大学助教授、専門家としての助言を惜しむことのなかった成川岳大、未公刊論文を送って頂いた高木一輝にも感謝の意を表したい。言うまでもなく、本稿執筆内容の全責任は執筆者にある。